

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」

平成30年6月6日（水）

昔の中国の紀元前の秦の時代。

始皇帝が亡くなって、二世皇帝・胡亥の世になると、周辺のかつての小国で次々に乱が勃発する。その火付け役となったのが陳勝という人物。

この陳勝は若い頃、仲間とともに人に雇われて農作業をしていた。

ある時、彼は耕作の手を止めて丘の上に行き、長い不満のため息をついて言う。

「もし将来、富貴の身分になっても、お互い忘れないようにしましょう」と。

すると雇い主が笑って答えた。

「お前は雇われ農夫に過ぎないのだ。どうして富貴になんかになれるものか」

そこで陳勝が大きくため息をついていった。

「あ～あ。ツバメやすずめのような小鳥に、どうして鴻や鵠のような大鳥の大志がわかるうか」

耕をやめて壟上に之き、長恨すること之を久しゅうして曰く

「苟し富貴なりとも相忘るること無からん」

傭者笑って応えて曰く、「若傭耕を為す。何ぞ富貴ならんや」と。

陳勝、太息して曰く、「嗟乎、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と。

で、二世皇帝の即位の年。

陳勝は呉広とともに、徴兵され、総勢900人で守備兵として北に行くことになった。しかし途中で大雨にあい、道路が不通になる。行軍はできず、だからといって期限までに現地にとどり着かねば秦のきびしい法律によって斬罪に処せられるのは目に見えている。そこで陳勝は決心した。

「われわれはすでに期限に遅れた。目的地に行き着いても待っているのは死だ。どうせ死ぬのなら、のるかそるか、一旗あげて名を後世に残そうではないか。

王侯や將軍大臣だとて人に違いがあるわけではあるまい。同じ人間の私たちだって、そういった身分のものになれるのだ！」

陳勝の反乱は成功した。行く先々の城や街を攻め落とし、各地の豪傑が陳勝に呼応する。遂には楚王となり、先に口にした富貴を実現することになったのである。

しかしこの後権力の虜となった彼は猜疑心と混迷のなかで、部下に殺されてしまうことになる。

で、次に立ち上がったのが（というか並行しているが）、項羽と劉邦。

陳勝が死んでから2年後、秦の三世皇帝・子嬰は劉邦に降り、秦国は前206年に滅亡する。

「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と大見得を切って勉強してみることも大事と今だから思います。